

令和七年度 帝塚山中学校 二次A入学試験問題・国語 (その一)

受験番号

※答えはすべて解答用紙に書きなさい。 ※選んで答える問題は記号で答えなさい。

※特にことわりのないかぎり、句読点やかぎっこはすべて字数にふくみます。

※設問の都合上、本文に一部省略があります。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

そもそも私たちはなぜ空気を読んではしまうのでしょうか。周りに同調して行動しているとき、私たちには、自分がなぜそうした行動をしているのか、説明することができません。いや、それどころか、自分が空気を読んでいること自体に、気づかないことさえあるでしょう。※ギャツピーのような、空気を読めない人間を目の当たりにして、はじめて自分が周りに同調して行動していたことに気づく――¹ そうしたことがほとんどであるように思います。

つまり私たちは、空気を読もうとして、空気を読んでいるではありません。気がついたら空気を読んでいるのです。² なんだか不思議な言い方になっていますが、おそらくそれが事実ではないでしょうか。

こうした現象に対して、極めて鋭い分析を展開した人物がいます。二〇世紀ドイツの哲学者、マルティン・ハイデガーです。

彼は、人間の³ 存在のあり方を二つの種類に区別しています。一つは「本来性」で、もう一つは「非本来性」です。本来性は、人間が自分自身の可能性に従って、自分を理解している状態であり、非本来性は、自分自身ではない可能性に従って、自分を理解している状態です。

⁴ **A**、自分らしく生きている状態が本来性で、そうではない状態が非本来性、と考えてもらえば、大丈夫です。**B**、私たちは普段、どちらの状態で生きているのでしょうか。当然、それは本来性である、と言いたくなります。ところがハイデガーは、日常生活において人間は常に非本来性の状態にある、と言うのです。つまり人間は、基本的にはいつも、自分自身を見失い、自分らしくない形で生きているのです。

それでは、非本来性とは、具体的にはどのような状態でしょうか。ハイデガーによれば、人間は日常において、誰でもない誰かとして、匿名的な「みんな」の一員として存在しています。彼はそうした「みんな」を「世間」と呼んでいます。世間とは、特定の誰かではありません。世間で「こうだ」と言われていることを、誰が言い出し、誰がそれを認めたのかは、まったくわかりません。そうであるにもかかわらず、私たちは世間の一員として、世間のなかに取り込まれてしまっているのです。それは、空気を読んでいる状態、【あ】に支配されている状態に他なりません。

〈中略〉

問題なのは、それでは、どうしたらその空気に従わないことができるのか、という点です。同調はしばしば私たちを暴力へと荷担させます。それを回避するためには、同調圧力に対して、何らかの形で脱出することができなければなりません。ハイデガーの概念で言うなら、非本来性の状態を脱却し、⁵ 本来性を取り戻さなければならぬのです。

C、それにはどうしたらよいのでしょうか。非本来性に陥っているとき、「私」は誰でもない誰かになっています。それは言い換えるなら、個性を失っているということ、別の誰かと交換できる存在になっている、ということです。なんだか切ない話ですが、当然そうなります。たとえば教室のなかで、「私」がみんなと同じように行動しているなら、そう行動するのが「私」でなければならない理由は特にありません。だから、非本来性の状態のとき、「私」はいてもいなくてもいい存在なのです。⁶ **I**

日常生活において、人間が⁷ 常に非本来性の状態にあるなら、人間はどんなときでも、いてもいなくてもいい存在である、ということになります。私たちの人生は、いつでも誰かと取り換えることができる、交換可能なものになってしまっています。ところが、ハイデガーによれば、⁸ このような考え方が成立しなくなってしまう、大問題があるのです。

⁹ **J**、それが、死です。

死!? と思われましたか。まあびっくりしますよね。ハイデガーを読む人は必ずそこで驚くので、自然な反応ですよ。

ハイデガーによると、死を他者と交換することはできません。¹⁰ **II**

D、「悪魔が「私」に呪いをかけたとしましよう。そして、「私」がその呪いを別の誰か（ここでは仮に珍太郎くんにしましよう）に移したとしましよう。珍太郎くんが「私」に移された呪いのせいで死んだとしましよう（かわいそうな珍太郎くん）。このとき、珍太郎くんは「私」の代わりに死んだわけですが、しかしだからといって、「私」の死が【い】消しになったわけではありません。呪いがあるうがなかるうが、「私」はいつか死ぬからです。そして、「私」の代わりに死んだ珍太郎くんにとって、その死は「私」の死ではなく、あくまでも珍太郎くん自身の「死」なのです。

したがって、ハイデガーが死という言葉で考えていることは、誰の人生にもいつか終わりが来ること、したがってそれは限られてい

令和七年度 帝塚山中学校 二次A入学試験問題・国語 (その二)

ること、そうした人生の【う】性であると言えます。そうした【う】性を意識すれば、私たちは自分の人生が、決して他者と交換できるものではない、ということに気づくことができるのです。

たとえば、何らかの難病にかかり、余命が一年だと宣告されたとしましょう。自分に残された時間を自覚した「私」は、今までのように空気を読んで、他の人と同じような生き方をするなどしないでしょう。きっと、世間から笑われたり、つまはじきにされたりしても、自分がやりたいこと、自分らしいと思えることをやるでしょう。このとき、人間は非本来性を脱却し、本来性を取り戻している、と考えることができます。

Ⅲ

とはいえ、人間はいつか死にます。余命が一年か十年か数十年かの違いでしかありません。誰もが気づいていないだけで、実際には余命宣告された人と同じ境遇にあるのです。そうであるとしたら、私たちは誰だって非本来性を抜け出すことができます。この世界には、誰一人として、¹⁰ 他者と交換可能な人間など存在しないのです。

Ⅳ

(戸谷洋志『悪いことはなぜ楽しいのか』より)

※ギャツビー……1925年にアメリカで発表された作品「グレート・ギャツビー」の主人公。

1 次の一文は文中のどこに入れるのが適当ですか。文中のⅠⅡⅢⅣから選んで答えなさい。

なぜなら、考えてみれば当たり前のことですが、「私」の代わりに誰かに死んでもらうことはできないからです。

2 —— 1 「そうしたことがほとんどである」とありますが、どういうことですか。最も適するものを次の中から選んで答えなさい。

ア 私たちは空気を読んでいない人と出会うことではじめて、周りと同調していることをはずかしく感じるということ。

イ 私たちは空気を読んで行動しているが、そうしない人との出会いによってその重要性を改めて理解できるということ。

ウ 自身が周囲と同じような行動をとっていることは、空気を読んでいない人と出会うことではじめて気づくことが多いということ。

エ 私たちが空気を讀んだ行動をする理由は、ギャツビーのような変わった人を通して理解できることが多いということ。

3 —— 2 「なんだか不思議な言い方になっています」とありますが、なぜ不思議と言えるのですか。最も適するものを次の中から選んで答えなさい。

ア 空気を読むとは現象とよべるほど自然に行っている行動なのに、鋭い分析が必要な研究対象であるような説明になるから。

イ 空気を読むとは状況を正しく理解する必要がある難解な行動なのに、いかにも簡単な行動であるような説明になるから。

ウ 空気を読むとは本来は周囲に気を遣いながら行うべき行動なのに、その気遣いが全く無用であるような説明になるから。

エ 空気を読むとは周囲の調子に自身を合わせるという意識的な行動なのに、無意識的な行動であるような説明になるから。

4 —— 3 「存在」と同じ構成をした熟語はどれですか。最も適するものを次の中から選んで答えなさい。

ア 道路 イ 前進 ウ 立腹 エ 着席

5 文中の A B C D に当てはまる語句として最も適するものを、それぞれ次の中から選んで答えなさい。

ア しかし イ それでは ウ 要するに エ たえば オ しかも

6 —— 4 「私たちは普段、どちらの状態で生きているのでしょうか」とありますが、私たちはどのような状態で生きているのですか。最も適するものを次の中から選んで答えなさい。

ア 常に個性を出すことができる状態で生きていると言いたい、場面によってはそれと相反する状態でも生きている。

イ 自分らしい状態で生きていると思いがちだが、実際はいつも個人として存在する意味を失った状態で生きている。

ウ 誰かと取り換え可能な状態で生きていると言いたくなるが、常に自分自身ではない可能性に従った状態で生きている。

エ 気づかぬうちに周りに同調する行動をもとりかねないような本来性の強まった状態で生きている。

7 【あ】にあてはまる表現を本文から四字で抜き出して答えなさい。

8 —— 5 「本来性」とありますが、本来性とはどのように生きることですか。文中から四十八字で探し、はじめの四字を答えなさい。

令和七年度 帝塚山中学校 二次A入学試験問題・国語 (その三)

9 ——— 6 「切ない」とありますが、同じ意味を持つ表現として最も適するものを次の中から選んで答えなさい。

ア 果てしない イ 情けない ウ やりきれない エ みっともない

10 ——— 7 「常に」とありますが、「一日中、いつでも」という意味になるよう、次の□に当てはまる漢数字をそれぞれ答えなさい。

□□時中

11 ——— 8 「このような考え方」とありますが、どのような考え方ですか。その説明をした次の文中にある□に当てはまる漢字を1文字で答えなさい。

C □ にあてはまる語句をそれぞれ文中から指定の字数でぬき出して答えなさい。

私たちは A (二字) を失い B (十四字) がなくなった存在であり、誰とでも C (四字) な存在として人生を送っているという考え方。

12 ——— 9 「それが、死です」とありますが、ここでは「死」とはどのような特徴を持つものとされていますか。最も適するものの中から選んで答えなさい。

ア 他者が請け負うことのできないものであり、誰にでもおとずれるはずの避けられないもの。

イ いっぴりかかるかわからないものであり、別の誰かに移すことのできない呪いのようなもの。

ウ 誰かの代わりに引き受けられるものであり、そうでありながらあくまでも自身の死であるというもの。

エ 非本来性から抜け出すために必要なものであり、誰もが驚きを感じてしまうようなもの。

13 文中の「【い】消し」とは「損得を差し引いて残りがなくなること」を意味する慣用句です。【い】に当てはまる漢字を1字で答えなさい。

14 文中の「【う】」に当てはまる語句として最も適するものを、次の中から選んで答えなさい。

ア 有限 イ 有利 ウ 限度 エ 限界

15 ——— 10 「他者と交換可能な人間など存在しない」とありますが、このように言えるのはなぜですか。六十字以内で説明しなさい。

16 本文の表現上の特徴について説明したものととして、最も適するものを次の中から選んで答えなさい。

ア 専門用語をたくさん使うことで、いかに難しい題材を扱っているかを伝えようとしている。

イ 具体例を多く使用したり読者に語りかけたりすることで本文を読み進めやすいようにしている。

ウ 「悪魔」や「死」など避けるべき単語をあえて使うことで、読者に驚きを与えようとしている。

エ 問いを投げかけながらも答えを示さないことで、読者自身の思考を深めようとしている。

令和七年度 帝塚山中学校 二次A 入学試験問題・国語 (その四)

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

明鹿高校のバレーボール部に所属する二年生の「景」は、大会の数日前に怪我をする。出場不可能になった「景」の代わりに稲村東高校との準々決勝に出場したのは、中学からのチームメイトで、部活をやめるつもり「北村」だった。本文は、「景」が、高校一年生で初めて参加したバレーボール部の合宿を思い返す場面から始まる。

【高校一年生の時を思い返す場面】

「どうしたの？」

「その自販機で飲み物買ってくる」

「ああそう」

北村は出入り口に向かいかけ、立ち止まる。

「景もなんか買う？」

「財布置いてきちゃった」

「お金貸そっか？」

いや大丈夫と断ると、北村は頷いて出ていく。それからしばらく帰ってこなかった。隅のテーブルに紐で括り付けられた古いジャンプをばらばらめくり、中身をあらかた見て飽きて、この紐を通すための穴はどうやって開けたんだろ、こんな分厚いののに、とか思い始めた頃に、ようやくペットボトルを手にした北村が帰ってきた。

「どこまで行ってたんだよ」

僕は呆れて言った。

「ちょっと遠くの自販。これ探してて」

北村は、手に持っていた緑色のペットボトルを掲げる。

「スプライト？」

北村がキャップを開けると、ぶしゅ、と心地よい音が、ごうんごうん、の波に混じった。一口飲むと、苦い薬を飲んだように顔を歪める。

「なにその顔」

「炭酸苦手なんだ」

「は？」

意味がわからない。でも、冗談を言ったようには聞こえなかったし、実際胸の辺りをさすっていた。「じゃあなんで飲むの？」

「今日は、¹そういう日だから」

北村は真面目くさった様子で言った。げっぷを堪えながら言ったのか、声の調子が変わったが、そんなことより僕は困惑して「そういう日」と鸚鵡返しするしかない。

「……いや、そういう日だよ」

「なにか特別な、良いことがあった日」

北村は躊躇うように少し黙ってから、やがて恥ずかしがるように続けた。「²禍福は糾える縄の如し、³ってあるでしょ。あれなの、スプライトは俺にとって」

「……まだ意味わかんないけど」

「良いことと悪いことは交互にやってくるわけ。小さい頃、おばあちゃんによく言われてさ、それを馬鹿正直に信じて、なにか良いことがあった日は自分が嫌がることをやってたんだ。そうすれば X が取れると思って。それで、苦手の炭酸を買った。我慢すれば飲めるけど、百五十円払ってまで飲みたくないじゃん。本当はカルピスとか飲みたいのに」

北村は言葉を切って、げっぷを飲みこむ。

「小さい頃の話じゃないの？」

「なんとなく、いまでも続けちゃってたんだよね」

³ 北村は苦笑いしながら言った。「続けようと思ってたわけじゃないんだけど、やるきっかけもなくて。だからいまでも、⁴ なにか良いことがあった特別な日にスプライトを見つけたら買うようにしてる。ごめん、こんなくだらない話、どうでもいいでしょ」

くだらないとは思わなかったが、反応に困った。やっと思いついて、今日あった良いことってなに、と聞こうとしたときには、
「明日も景が出んの？」

と北村が話を交えていた。

「出ないよ、たぶん。＊大野さんは足攣^{つな}っただけだし」

「そっか、残念だね」

「残念ってことはないけど。今日の試合でもう疲^{つか}れたし」

今日上手^{うま}く乗り切れたのはたしかだったが、一セットしか出ていないのに、とてつもなく疲労^{ひろう}を感じていた。明日も出ると思うと、気が遠くなる。

「それでどうだった、試合？」

「どうだったって」

僕は洗濯乾燥機の残り時間の表示を見つめる。「中学のときと、別に大して変わんないよ」嘘^{うそ}ではなかった。セットの序盤^{じょばん}こそ浮き足立^{うきあしだ}っていたが、一旦^{いったん}落ち着くと、感覚としては中学とあまり変わらなかった。

「にしても遊晴^{あゆはる}はすごいね。めちゃくちゃ上手い」

誰の目にも明らかかなことなのに、北村は自分の発見のようにしみじみと言葉にした。

僕は苦笑^{くしう}しながら、上手いなんてもんじゃないでしょ、と返す。

「才能^{才能}の塊^{かたまり}、っていうのはああいふ奴^{やつ}のことだよな。中学時代適当にバレーしてただけの奴じゃ、いまさら努力^{なつり}したって敵^{かた}うわけがない」自虐^{じぎやく}のつもりで言った。しかし微妙な沈黙^{ちんもく}がコインランドリーに降りてきて、それで、ああ北村のことを言っただけになっちゃったんだな、と気がついた。

気がついたが、訂正^{ていせい}する気は起きなかった。面倒^{めんどう}くさくなった。間違^{まちが}ってはいないし。北村はたしかに、中学時代適当にバレーしてただけの奴だった。ただバレー部に所属^{しゆく}しているだけ、というタイプの部員で、だからいま試合に出た感想^{かんさう}を気にしたり、遊晴^{あゆはる}を褒めたりするのを聞いて、北村ってこんな奴だったの？ と意外に感じていた。そういうわけか、⁶ほんの少し苛立^{いらだ}ちも覚えていた。

「北村はさ」

僕は微妙な沈黙を破って切り出した。

北村はスプライトを口から離^{はな}す。中身は全然減っていない。

「ずっと聞きたかったんだけど、どういう心境の変化なわけ？」

「心境の変化？」

「高校でバレー続けたこと」

僕は北村の手元のスプライトを見つめて、続けた。

「なんでお前、高校でもバレーやろうと思ったの？」

北村はすぐには答えなかった。俯^{うつむ}いて、瞳^{ひとみ}を彷徨^{さまよ}わせた。僕は答えをじっと待った。じっと待っているうちに、乾燥が終わった。

北村がどう答えたかは覚えていない。なんとも言わなかったのかも知れない。このあと僕たちは洗濯物を取り出して、宿舎に帰った。

⁷宿舎で、北村はまだ中身の残っているスプライトを流しに捨てていた。

とにかく、高校での北村との関係性は、この会話で決定づけられたんだと思う。

〈中略〉

【現在・高校二年生】

再来週の月曜から学期末試験が始まるから、次の日曜の練習を最後に、試験が終わるまで部活はオフになる。そして試験が終われば、すぐクリスマス合宿だ。

日曜は一日練習だった。十六時くらいにチーム練習が終わると、僕はこっそり体育館を出た。コートの外でストレッチをするのも、空いたコートで自主練習するのも、どちらも自分の居場所じゃないような気がしたからだった。

冷えた空気に身体を縮こませながら、部室棟^{とうしやう}に繋がる渡り廊下^{わたりろうか}を歩く。練習中に体育館を抜^ぬけ出してその辺をうろちろしていたのはほんの少し前のことだが、こんなに寒くはなかった。

寒いけど、でも⁸体育館の中よりは息がしやすいかった。

部室棟はひっそりしていた。男子バレー部の部室に入り、なんとなく奥^{おく}のベンチに腰^{こし}を下ろす。なにをしにきたんだっけ。なににきたわけでもない、一人になったかったんだ、とすぐに思い当たる。

午後の練習は、実践的なメニューが主だった。北村は遊晴^{あゆはる}や塩野^{しおの}と、守備範囲^{しゅびはんい}やブロックの位置を確認^{かくにん}していた。北村がなるべくブレイに関わらないことがチームの最善。そう言われていた稲村東戦のときは、⁹まるで違った。そして僕はその姿を反対側のコート

から、相手チーム役として眺めていた。こっち側にいるのは、僕以外全員一年生。態度には出さないけど、でも気を遣われているのははっきりわかる。怪我の影響がまだ長引いている先輩、もしくは怪我をきっかけに調子を崩した先輩。そういう、ちょっと

Y

突然、部室の引き戸がガラッと開いた。誰か来たと気づいた瞬間

Z

ような、恥ずかしいような心持がして、思わず腰を少しだけ浮かした。

「うわっ、びっくりした」

戸口に立つ北村は、扉に手をかけたまま声を上げる。

「……なにしてるの、こんなところで」

「いや。なんか取りにきたの？」

10 僕は北村の顔を見ないようにしながら、またベンチに座った。ゴムチューブを探して、と北村は答えて、壁際のラックを漁り始める。肩の筋肉を鍛えたりするときに負荷を加える道具で、いま北村が顔を突っ込んでいる場所ではなくその上の段にあると僕はわかっていて、あえて口にしなかった。

怪我した日の夕方、あのときも部室で僕は北村と二人きりになった。遠い昔のように思える。一カ月以上前から、実際遠い昔だ。

北村が、あった、とラックに突っ込んでいた手を引き抜いたとき、僕の脳裏には「バレー部に入って本当によかった」というこの間の、柿間さんの言葉が浮かんでいた。

「……北村はなんで、高校でもバレーを続けたの？」

北村は怪訝そうに振り返る。

「なに、いまさら」

「気になった。いまさら」

「去年の合宿でも聞いてきたよね、それ」

去年のゴールデンウィークの合宿で、ごうんごうんと震える洗濯乾燥機の前で、たしかに僕は同じことを訊いた。でも北村の答えは覚えていなかった。

「あのとき、お前ちゃんと答えなかったでしょ」

「いや答えたよ、景がおぼえてないだけ」

「なんて言ってたっけ」

「バレーやりたかったから」

僕は顔を上げて北村を見て、すぐその手の中のゴムチューブに視線を逸らした。

北村は口を閉ざしたまま笑った。僕と自分自身、両方向に放たれた嘲笑に思えた。

「俺、変なこと言っていないよな。俺がバレーしたいって言うの、そんなに意外かな」

「そりゃ意外でしょ」

気を遣うつもりはなかったから、僕は即答した。「中学のときは、試合なんかまったく出でなかったんだから」

北村はしばらく黙って、右手の指を親指から一本ずつ、左の手で揉んだ。今日の練習中に負傷したのか、小指が少し変色し、腫れているように見えた。

その小指に触れてから、北村は口を開く。

「中学の最後の試合に、俺が出たの覚えてない？」

中三の夏の記憶を辿った。かなり遠くに霞んでいたが、ひどく暑い日だったこと、僅差で負けたこと、それと中学三年間で一番のスパイクが打たれたことは覚えていた。打球を弾いたレシーバーの顔も思い出せるような気がする。でも北村がコートにいたことは、言われても思い出せなかった。

そりゃあ景はおぼえてないか、と北村は笑った。

「出たんだよ、試合に。ピンチサーバーで。ほんと些細なプレイだったけど。俺がサーブ打ったあと、相手レフトからスパイクが打たれた。ブロックに当たって跳ねて、俺の少し右の方に飛んできた。俺は走って、腕を伸ばして、拾った。ボールは綺麗にセッターに返った。セッターだから丸ちゃんだよ。いまなにしてんだろ、あいつ。高校どこだったっけ？」

「……それで？」

「ああ、それで丸ちゃんは景にトスを上げた。景はそれを決めた」

北村は、淡々とした口調で続ける。

令和七年度 帝塚山中学校 二次A入学試験問題・国語 (その七)

「俺のレシーブが繋がって、得点になって。景からしたら、それがどうしたって感じだろうけど、なんて言うんだろう、自分がチームに参加している感じがすごくして、気持ちよかった。久しぶりにバレーを楽しんでいた。その瞬間まで、中学でバレーなんかやめてやるつもりだったけど、あの一点があったから、高校でもバレーやろっかなって気になった」

ただの一点。些細なブレイ。セットポイントでも、逆転の一手でも、流れを引き寄せた得点でもなく、そもそも自分で決めたわけでもない。でもそれだけで、¹¹景色が一変する感覚は、僕も知っていた。いや正確に言えば、知っていたはずだった。

「だから入りたてのころは結構モチベーションもあったんだよ。最初の合宿で景が試合に出たじゃん？ あのととき、中学から知ってる景が高校でも通用してるの見て、嬉しかった。俺もやれるのかもって思った。まあ全然だったわけだけど」

またあの合宿の話かよと思ったが、同時に、コインランドリーで話したとき北村がスプライトを飲んでいたことを思い出す。なにがいいことがあった特別な日には、Xを取るために苦手な炭酸を飲む、という北村の変な癖だ。

「最近景の代わりに試合に出て、それで何回かまた楽しいって思える瞬間があった。そのおかげで、俺はバレーが好きなんだって、ちゃんと思いつけた」

バレーが好き。バレーがしたかった。景と一緒に。北村の発した言葉は、奔流^{※ほんりゅう}となって頭の中をかき乱し、次第にこの部室みたいに雑然としてきて、わけがわからなくなってくる。

「景」

北村が躊躇いがちに放った一言で我に返った。北村は扉の前で振り返る。

「……あんまり俺のこと、舐めないでほしい」

¹²透明な手で平手打ちを受けたように感じた。全身の筋肉が一度に硬直する。透明な手はそのまま僕の肩を掴んで、押さえつけてきて、僕はそのせいで身じろぎ一つできなかった。

北村は部室を出ていく。夕闇に沈んだ近くの本立で、小鳥が叫ぶように鳴いた。

(坪田侑也『八秒で跳べ』より)

※大野さん：景たちの一つ上のバレーボール部の先輩。

※遊晴：景たちのチームメイト。

※塩野：景たちのチームメイト。

※柿間さん：景たちの一つ上のバレーボール部の先輩。

※僅差：ほんの少しの差。

※奔流：勢いのはげしい流れ。

1 ——— 1 「そういう日」とありますが、どのような「日」ですか。十六字でぬき出して答えなさい。

2 ——— 2 「禍福は糾える縄の如し」とありますが、どのような意味ですか。「〜ということ。」に続くように、本文から二十字以内でぬき出し、初めと終わりの五字を答えなさい。

3 Xに入る言葉として最も適するものを、次の中から選んで答えなさい。

ア リスク イ 裏 ウ バランス エ 上げ足

4 ——— 3 「北村は苦笑いしながら」とありますが、この時の「北村」の気持ちとして最も適するものを、次の中から選んで答えなさい。
ア くだらなれと思いつつも、幼いころから続けている習慣をなかなかやめられない自分に対して呆れている。

イ 高校生にもなって炭酸が苦手だということを友人に知られた恥ずかしさをこまかそうとしている。

ウ 幼いころの祖母の教えに縛られている自分は、他人からは子供っぽく見られるだろうといじけている。

エ げっぷを堪えながら発した声がおかしかったため、景に褒だと思われたかもしれないと恥ずかしく思っている。

5 ——— 4 「なんか良いことがあった特別な日にスプライトを見つけたら買うようにしてる」とありますが、ここでの「良いこと」とはどのようなことですか。五十五字以内で説明しなさい。

令和七年度 帝塚山中学校 二次A入学試験問題・国語 (その八)

6 ―― 5 「浮き足立っていた」とありますが、「浮き足立つ」を正しく使用しているものとして最も適するものを、次の中から選んで答えなさい。

ア 明日からの春休みを前に、生徒たちは浮き足立っている。

イ 突然起こったトラブルに、そこにいた人はみな浮き足立った。

ウ 一日中歩き続けたために、疲れて浮き足立ってしまった。

エ 彼は怒りを表すために、わざと浮き足を立てながら近づいてきた。

7 ―― 6 「ほんの少し苛立ちも覚えていた」とありますが、この時の「僕」の気持ちとして最も適するものを、次の中から選んで答えなさい。

ア 上級生に代わって試合に出た景には特に言及せず、遊晴のプレイばかりを褒める北村の態度を不満に思っている。

イ 自虐のつもりで言った言葉を、北村が勝手に自分に向けられたものと勘違いして黙ってしまったため、面倒くさく思っている。

ウ バレーボール部に所属しながら真剣に部活に取り組まない北村が、試合やプレイについて語ることに腹立たしく思っている。

エ たった1セットとはいえ、景は試合に出てすっかり疲れていたため、長々と話しかけてくる北村をうっとうしく思っている。

8 ―― 7 「宿舎で、北村はまだ中身の残っているスプライトを流しに捨てていた」とありますが、それはなぜですか。最も適するものを、次の中から選んで答えなさい。

ア 景が満足するような答えを言うことができず、北村は楽しい気分でスプライトを飲めなくなったから。

イ 北村は景が二人のやりとりを覚えていなかったことを悲しく思い、スプライトが喉を通らなかったから。

ウ 元々炭酸が苦手な北村は我慢してスプライトを飲んでいたが、やはり一本飲み切ることは難しかったから。

エ 景からの問いかけで高まっていた気持ちがこなわれ、北村はスプライトを飲む必要がなくなったから。

9 ―― 8 「体育館の中よりは息がしやすかった」とありますが、この時の「僕」の気持ちとして最も適するものを、次の中から選んで答えなさい。

ア 怪我の影響が長引き本格的に部活に参加できない時間が長かったため、チームのメンバーとしか打ち解けて話せなくなり、体育館を居心地の悪い場所だと感じている。

イ 試合を想定し戦略を立てている同級生の会話にも入れず、景に気を遣っている下級生ともなじめないなので、自分がいるのにふさわしい場所ではないと感じている。

ウ 試合で勝つために戦略を練っているチームのメンバーがあまりにも真剣に話し合っているため、怪我を理由にストレッチャばかりしている自分は場違いだと感じている。

エ 体育館はチームのメンバーの熱気あふれる練習や話し合いが行われているため、部員でもない自分が体育館にいるのはじやまになると負い目を感じている。

10 ―― 9 「まるで違った」とありますが、どのように「違った」のですか。最も適するものを、次の中から選んで答えなさい。

ア 北村は、以前はプレイが認められず試合に出してもらえなかったが、今は努力が認められてチームの一員になっている。

イ 北村は、以前はバレーボールに対する情熱がなかったが、今はプレイすることの楽しさに目覚めている。

ウ 北村は、以前は遊晴のプレイに憧れて見ただけだったが、今は対等にプレイできるまでに上達している。

エ 北村は、以前は数合わせのようなメンバーでしかなかったが、今は戦力の一人として試合の戦略を立てている。

11

Y	と	Z
---	---	---

 に入る語として最も適するものを、それぞれ次の中から選んで答えなさい。ただし、同じ記号は二度使えません。

ア 後ろ指を指される イ バツが悪い ウ 異彩を放つ

エ 腫れ物に触る オ 鼻を折られる カ 身につまされる

令和七年度 帝塚山中学校 二次A入学試験問題・国語 (その九)

12 ——— 10 「僕は北村の顔を見ないようにしながら」とありますが、それはなぜですか。最も適するものを、次の中から選んで答えなさい。

- ア 自分の代わりに試合に出ている北村に対して複雑な思いを抱いているから。
イ 練習をさぼって部屋にいることを見とがめられないかと不安に思っているから。
ウ ゴムチューブのある場所を知っていることを、北村に知られたくなかったから。
エ 相手チームのメンバーである北村とはあまり話さない方がいいと思ったから。

13 ——— 11 「景色が一変する」とありますが、それはなぜですか。最も適するものを、次の中から選んで答えなさい。

- ア 自分は直接得点していないが、チームを勝利へ導くプレイができ、それが自分のバレーボールに対するやる気を上げたから。
イ 他人には大したことのないプレイでも、自分には意味のある出来事であり、改めてバレーボールの楽しさを実感できたから。
ウ それまではバレーボールに価値を見出せなかったが、たまたま出場した試合で得点をし、バレーボールの意義を発見したから。
エ 試合でピンチに陥っていたが、たった一点の得点でチーム全体のモチベーションが上がり、チームが一丸となったと思えたから。

14 ——— 12 「透明な手で平手打ちを受けたように感じた」とありますが、この時の「僕」の気持ちとして最も適するものを、次の中から選んで答えなさい。

- ア バレーボールが下手だとばかりにしていた北村から、目にも止まらぬ速さでたたかれたことへの驚き。
イ 常にためらいがちな応答をしていた北村が、突然強い口調で言い返してきたことへのとまどい。
ウ 単に部に所属しているだけだと思っていた北村から、バレーボールに対する真剣な思いを初めて聞かされた衝撃。
エ 北村との一年前の会話をすっかり忘れており、それを北村本人から指摘されたことに対する申し訳なさ。

15 本文の表現上の特徴について説明したものとして、正しいものにはA、誤っているものにはBと答えなさい。

- ア 本文中の波線部「古いジャンプをこんな分厚いのには、景の好奇心旺盛な性格を表している」は、景の好奇心旺盛な性格を表している。
イ 本文中に多用されている「……」は、会話の間を示しており、話者のとまどいや困惑を表現している。
ウ 短い会話を多用することで、物語が軽快なテンポで進められており、景と北村の親密な関係を表している。
エ 北村が探していたゴムチューブは、景の「誰にも見つけられたくない」という思いを比喩的に表している。
オ 本文は景の一人称視点で描かれており、言葉としては発していない景の心情が描かれている。

令和七年度 帝塚山中学校 二次A入学試験問題・国語 (その一〇)

三

次の1～10の――部のカタカナを漢字に、11～15の――部の漢字をひらがなに直しなさい。

- 1 彼のイサミ足によってせっかくの計画がつぶれてしまった。
- 2 社長は失敗のセキンを取って仕事を辞めることを決めた。
- 3 からからに乾いた土は落ちた汗をすぐにキュウシュウしていった。
- 4 スポーツをする上では、キンセイの取れた体が良いとは必ずしも言えない。
- 5 キリスト教では、神が天地をソウゾウしたと伝えられている。
- 6 ある人の軽々しい行動が、多くの人の誤解をマネーてしまった。
- 7 あなたの頭の回転の速さにはただただケイフクするばかりです。
- 8 やるべき事は全てやり切ったので、あとは運命に身をユダねるだけだ。
- 9 病院に入院している妹をタズねると、まだ少し具合が悪そうだった。
- 10 この飛行機のモケイはいくつもの部品からできている。
- 11 あいつは目の前に立ちはだかる敵をまたたく間に退けた。
- 12 ふだんの食事で足りない栄養素をサプリメントで補う。
- 13 家の給湯器がこわれてしまったので、今日はお風呂に入れない。
- 14 線路に人が入りこんでいたので、電車の運転士は警笛を鳴らした。
- 15 私を裁く資格がある者は、ここには一人もいないはずだ。

13	9	5	1	三	15	11	6	5	3
	ねる	ソウゾウ	み	イサ	ア	Y			
14	10	6	2		イ	Z	7		4
				セキニン	ウ				
	モケイ	マネ			エ	12	8		
15	11	7	3	キュウシュウ				9	
く	けた	ケイフク			オ	13			
	12	8	4	キンセイ		14	10		
	う	ユダ							
		ねる							

受験番号

ここにシールを貼ってください

--



251310

2

良いことと
く
や
っ
て
く
る

1

なにか特別な、
良いことがあった日

二

16

イ

15

私たちは自分に残された時間を自分で過ごす、それにより非本来性を抜

12

ア

13 帳

14 ア

C

交換可能

B

「私」でなければならぬ理由

11

A

個性

9

ウ

10 四六時中

7

（非同本庄来カ）性

8 世間から

5

A

ウ

B

イ

C

ア

D

エ

6

イ

1

II

2

ウ

3

エ

4

ア

一

13

きゅうとうき

14

けいてき

15

さばく

9

訪ねる

10

模型

11

しりぞけた

12

おぎなう

5

創造

6

招いて

7

敬服

8

委ねる

1

イサ

2

勇み

3

責任

4

均整（斉）

三

15

ア

B

イ

A

ウ

B

エ

B

オ

A

11

Y

エ

Z

イ

12

ア

13

イ

14

ウ

6

イ

7

ウ

8

エ

9

イ

10

エ

5

中学でチームメイトだった景が高

校最初のバレーボール部の合宿で

試合に出たのを見て、自分もやれ

るかとも思えたこと。

3

ウ

4

ア